

浄土

1976-11



昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一冊、日曜刊
昭和二十四年四月二十八日、運輸省(特別授承認雜誌)第三二五号
昭和五十一年十月二十五日印刷 昭和五十一年十一月一日発行
第四十二卷 第十一号



尊譽隆善



齊^{せい}
心^{しん}

細田隆善

(東京・深川勢至院住職)

「齊心」とは、心をそろえる字義から、夫婦相和する意味をもち、さらに和の精神、僧伽の心につながるものである。

「齊」という文字は、麦の穂を三本そろえた象形文字から、できあがったものである。

「心」は、心臓の形から、象形文字としてできた。

麦の穂に風渡りゆく寺の門 豊明

麦の穂が、一齊にのびそった風景は、美しいものである。精神生活は、相協調し、相和するところに、その尊さがある。

十一月号



目次

△法話▽自然の吐く意見を聞こう……………	松原泰道……………(2)
「四人一卓」の普茶料理問答……………	三浦純亭……………(7)
法然と親鸞……………	松野純孝……………(8)
現代とこころのシリーズ ^⑩ ……………	
死を忘れた現代人……………	藤井正雄……………(13)
現代人の心の世界……………	……………(17)
お経のページ……………	……………(21)
△随想▽スイスの秋……………	山田昭全……………(22)
浄土教の流れ△十一▽始めあれば終りあり……………	竹中信常……………(27)
法数術語十二月(十一月の巻)……………	宝田正道……………(32)
△読者の声▽ネパール語に接して……………	吉田勇之助……………(34)
念仏ひじり三國志(三十一)法然をめぐる人々……………	寺内大吉……………(37)

表紙 久住 静雄画

カット 大正大学美術部



〈法話〉

自然の吐く意見を聞こう

松^{まつ}原^{ばら}泰^{たい}道^{どう}

「裏切られた夏でありましたが……」と、まことに気の利いた残暑見舞の言葉をいただいた。昔から「暑いも寒いも彼岸まで」というのに、またそれが事実でもあったのに、この秋彼岸は重ね着をしたいほど、不順な季候で不安である。

そこへさきごろの天災である。台風十七号のもたらした豪雨の爪あとは容易に癒えない。罹災された方々は季候異変の寒さに悩んでお

られることと身のすくむ思いがする。不幸にして遭難死された犠牲者に合掌まいらすとともに、謹しんでお見舞申上げるものである。日本は天災の多い国だ。わたし自身遭遇した台風の中でも、大正七年十月一日未明に東京を襲った大風（当時はまだ台風といわなかった）のとき、わたしは小学生だったが、子どもの耳に響いたあの風のうなり声が、まだはつきりと耳に残っている。

また大正十二年九月一日の関東大震災の地動のにぶいごう音は骨までしみ通って今でも聴えてくるようだ。幼年のときの大水の凄まじさも印象にある。そうした記憶や経験を数えあげたら限りがないであろう。

数年前になるが、故鈴木大拙博士の年譜（岩倉政治氏編）を読んでいて、たまたま次の記事が目についた。

一九二三（年）九月、鈴木（大拙博士）は、鎌倉で自分等の住居である円覚寺の正伝庵が、関東大震災のために倒潰した庵をながめながら、「自然が、人間のやった仕事に対して、『意見を吐いた』と感心した。」

まことに興味深い記述だ。当時、鈴木博士は五十四歳だという。博士の面影が想像される。この記事をはじめて読んだとき、いかにも鈴木博士らしい発言でおもしろいと思っただが、実はわたくしの浅はかな理解で恥じる。

おもしろいどころか四十年後の現代人に対して、深いところからの大いなる呼びかけに外ならないのだ。

関東大震災前の世相は、識者から浮華輕佻（うきけいちょう）——外面は花やかだが、実質のない浮薄さが難じられていた。さしあたり「昭和元禄」に對する「大正元禄」であった。したがって、大震災が起こると、いわゆる評論家たちは口をそろえて『天譴』だと警告を発する。天譴とは、天がふらち者にくだす咎めの意味で、天罰と同意語である。やがて、天皇からは「精神作興」に関する詔書もおりて、国を挙げて世直しの精神運動が展開される。

もちろん宗教家も動員され、東京では「辻説法」が繁華街や交通の要所で行われた。當時中学生だったわたしは、昼間はピラ配り、夜間はちようちんをかかぎて講師の顔を照らす雑用をいつけられた覚えがある。宗教家の講演も「天譴」一点張りで、おなじ時代に生れた共業のいたみは聞けなかったように思

う。

それに引きかえ鈴木博士が、倒壊家屋の砂塵のたちあがるさ中で、「自然が、人間のやった仕事に対して『意見を吐いた』と、意見をさながらに聞いて、天譴、天罰という高踏的な発言をされなかったことを、改めて学びたいと思う。

わたしは、かつて雑誌か何かで、どなたかが、『意味』とは、こころの味である」と教えておられた。わたしも、この教えを深くうなずく。すると『意見』とは、こころの見解であろう。こころの見解とは、八正道の「正見」となろう。天譴という天の思想もさることながら、原始仏教以来、人間が理想の境地に達するための、八種の正しい生活態度と受けとるこころ構えである。

二宮尊徳翁に『不文の教（え）』がある。搦田恵吉氏著「二宮尊徳翁選集」に次のように紹介されている。

天、何をか言わんや、四時行われ百物生ず
(原漢文)

「声もなく香もなく常に天地はあめつち か（書）
かざる経をくり返しつづ」（中略）、仏（教）
は三世因縁を説く。是れ「儒」の及ばざる
処なり（中略）。是をわが流儀の「書かざる
の経」に見るときは、釈氏（釈迦）未だ此
世に生れざる昔より行われし天地間の真理
なり（後略）

尊徳翁の「不文の教」は味うべきだが、正見はまた翁の教と似るが、むしろ「自然法爾」と通じ合うと思う。自然法爾は、おのずからのすがたのままが真理そのまま、という示しであろう。

よく知られている禅語に「柳は緑、花は紅」がある。柳も花も、ともに緑だとか紅だとか言挙げをしない。言挙げせぬままに柳は緑で花は紅なのが自然法爾であり、そのままになずくのが正見（意見）であらう。

柳は緑、花は紅との知覚は経験的知識である。この経験的知識をふまえて、人間だけが自分の生きざまをさとする働きがある。それが体験的智慧と呼ばれる英知であろう。経験と体験、知識と智慧と区別されるゆえんもまたここにある。

自然は、人間の声を持たないから、人間の声で自分の意見を吐かない。自然は、自然のたたずまいで意見を告げている。この呼びかけが味えるのが意味、見えるのが意見と解説できよう。

こう見ると、自然のたたずまいが意見と聞えるのは、人間の中に埋みこめられている正見と出あって、はじめて人間のたたずまいのありようが学べることになる。自然の意見を聞く必要さと、それが聞える人間のたたずまいの大切さをしみじみと思う。

先年、東京都狛江市で大水害があった。それから数日後に、評論家の俵萌子さんが、ある民放のテレビの依頼で罹災者の主婦達と座

談会を持たれた。そのときの状況を、ふとした機会で俵さんから伺ったことがある。

スタジオに集った主婦の多くは、当然のこととが災害のショックで発言する勇氣もない。ただ一人の主婦だけが極めて明朗で、笑顔すら浮べて、

「俵先生、家が流れてよかったのです」と言い切る。理由を聞くと、彼女は、

「わたしたち一家は、われわれ夫婦と二人の成人した息子と娘の四人暮しです。いつの頃からか、みんながそれぞれでんばらばらの生活をはじめました。おなじ家に住みながら家族同士顔を合わさない日も珍らしくありません……」

「災害当日も、二人の子どもがどこからか駆けつけて来て、危険を冒かして家の中からステレオやレコードなど、自分らだけの家具を持ち出しました」と。

やがて彼女らの家に浸水する。小高い丘の前を、わが家が激流に引かれていく。ついに

川底に沈んで再びわが家が見えなくなって、家族全員が、がっくりと肩を落とす。

「そのときです」と、さすがに先きほどの笑顔は消えていた。そして涙声で彼女は話をつづけたという。

「丘の上でも、ばらばらに付んでいた四人がいつの間にか寄り添っていたのが、落とした肩に感じました。寄り添っただけではありません。気がついたらみんなが手を握りあっていたのです。わたしたちの手はみんな汗でぬれていました。主人が長男か、さだかでありませんが『おれたち、まちがっていたなあ、これからは、人間らしい生き方をしよう、なあ……』との呻きにも似た声が聞えました。それと同時に、家族全員が抱きあわんばかりに声あげて泣いたのです……」といいつつ、その主婦もスタジオに打ち伏して号泣した。

やがて、彼女は涙を拭いて身づくろいをし

て、
「懐先生、家も財産も流れました。しかしそのおかげで本来の人間に立ち帰れたのです。水害のおかげで目がさめたのです……」

懐さんのお話は、大体こうした内容であったように思う。聞いたわたしも大きな感激に打たれた。

この主婦の一家は、「自然の意見」を的確に聞き得たようだ。大水に流されゆくものの中に、いかなる激流も流すことのできない、純粹な人間性を自覚して、はじめて意見が「正見」と同意語になるゆえんを学ぶとともに、いつ、どこでも、自然の吐く意見を深くさとりたいと思う。

二「四人一卓」の普茶料理問答二

み　うら　じゅん　てい 三　浦　純　亭

(煎茶道黄檗幽茗流家元)

奇数を好む中国人が普茶料理は四人一卓とするところは如何なるものかと、社中の者よりよく問われる。たしかに中国人は陰陽五行説といつて五の数字を好む。又日本人もそれにならつて、三五七の奇数を好み、茶道の中の總ての手法、美を構成させる奇数でなりたっている。

たとえば、足の運びも三步五歩七歩九歩、客も五人にはじまる。又三客手前の教え方もあるに對し、煎茶につきものの普茶料理は四人一卓の四の組合せであるからおかしいという。

中国人は中庸といつて真中を好み、中とその左右をあわせた三の数字を尊重される。又天地人と三が揃つて一つの言葉

となり宇宙を構成している。天地人は「三、一」という。三が合さつて一になるからであらう。

「道は一を生じ、一は二を生じ、三は万物を生ず」とは老子の言葉である。三拝九拜、こんな言葉は中国人ならずとも日本人の常套語である。中国では三は数の完成したもの、九は数の終とすといふほどに、斯様に奇数をとうとび、その中でも三を尊ばれているが、その半面割切れる四も尊ばれているようでもある。

日本人は、三を好んでも、四を全くきらい。四は死につながる忌み言葉でさらに、病棟の四号室はないという。

しかし考えようによれば四は安定性で

もある。鼎は三本足であるが、いくら三をよしとしても三本足は不安定でもあらう。

四つの足は安定性がある。その上四の言葉の中にも、インド由来の四天王方位神がある。北の多聞天、東の持国天、南の増長天、西の広目天、又は四君子(菊、蘭、梅、竹)も四の数で目出度い草木になる。春夏秋冬の四季にも通じ、四季のない風土は人間生きるには風情がない。東西南北とやはり四つの組合せの方位の自然の在り方。

そこで私は答えてみた。

普茶料理の卓の四本の足は安定性で、四人組合せは「四海皆兄弟」というところから一つの器の同じ普茶料理を四人に取りわけ、同時に食し、血となり肉となるところから、知音(相許し合う)の間柄を示し、和を生じるゆえに「和の精神」からの発想の食事法であると……。

法然と親鸞

(一)

法然の専修念仏に親鸞が回心したのは親鸞の二十九歳の時であった。この時、法然は六十九歳である。

法然が善導のように三昧発得し、仏と対話できるようになったのは、六十六歳と伝えている。三昧発得した人というのは、長い仏教史の上でも、数えるほどしかないだろう。そういう大変な境地に法然

まつ
松野 純孝
じゅん こう

(鶴見大学教授・文博)

は、六十六歳の時に達したのであった。これから考えて、親鸞が、それから三年後の法然から直々に教えを蒙ったということは、最も円熟したものに会ったことを意味する。

親鸞は、十のものは九では納得できなかった。九、九九九……でも駄目だった。それ程、理づめだった。親鸞は、法然に何故、念仏が今の時代に最もすぐれたものであるか、について、根掘り、葉掘り、百日間、通いつづけて質問した。なぜか、なぜか、を百日間、続けたのである。それに対する法然の答は実に



簡単だった。「ただ念仏しなさい」と。ただこれだけだった。どんな質問にも、「ただ念仏して」。これだけだった。百日間の質問に対する答は、ただこれだけだったのである。結局のところ、なぜか、という親鸞の問いには、法然はその理由を示してくれなかったのである。理由を示さないばかりか、念仏はそうした理由づけを拒むものであることを暗示していたのであった。

(二)

親鸞が法然の専修念仏に回心したのは、このように、念仏の根拠が明らかにされたためではなかった。念仏の根拠づけを拒む法然その人に、すっかり参ってしまつて回心したのである。親鸞は、たとい法然にだまされて地獄に堕ちても一向に後悔しない、と述懐している。ここに、だまされても、と言っていることは、法然の念仏がいかに理由づけの出来ないものであったか、無根拠のものであったか、を語っ

ている。親鸞はまた法然を阿弥陀仏の化身として信じ、それを決して疑わなかった。親鸞は、いつも法然の言葉によつて、自分の念仏を吟味していた。回心以後の親鸞の生涯は、法然の念仏にどのような一枚になるか、これだけだったといつてよい。かつて鈴木大拙博士は、法然と親鸞とを分離することはできぬ、二人によつて専修念仏はでき上つた。法然の法と親鸞の親との一字ずつ取つた法親というべきである。というようなことを書いておられたと記憶している。うがつた言葉だとおもう。

親鸞は、信の確立には次の三つがそなわっていないければならぬとした。①法をそのままに聞くこと、②自分の問いを持ち、その問いをもつて法に問ひかけること、③現身に得道した人(得者)を信ずること。この三つである。親鸞の信は、この三つをそなえた上に確立していった。法然を弥陀の化身と信じて毫も疑わなかったことは、③の得者を信じたことである。親鸞の言葉を収録した『歎異抄』を、法然の言葉としても差支えないほど、二人の言葉は一枚

になっている。①②は説明を要しまい。

(三)

親鸞は法然の念仏に回心してから、専らといつていいほど、いなかの人びとと交った。二十九歳で回心してから三十五歳まで、法然の吉水草庵にいた。この京都時代にもすでに京都の近郊で、いなかの人びとと交ったり、都内では弓の弦や杵をつくり渡せし、祇園の祭日には神輿の護衛などしていた犬神人たちと交っていた。三十五歳で新潟県の上越に流されてからは、三十九歳で流罪が許されても、京都へ帰らず、なお四十二歳まで新潟県に踏みとどまった。そして四十二歳から茨城県を中心とする関東にゆき、六十二歳頃まで東国の人たちと交っていた。六十三歳頃、故郷である京都に帰り、九十歳の死に至るまで、京都に生活した。しかし、この晩年の京都時代も、心は専ら東国のいなかの人びととの交りにあったといっている。そして新潟県に流されてから自分

の名を愚禿と称した。

このように回心以後、愚鈍な、あさましいいなかの人びとや犬神人らと徹底して交わることに努め、自ら愚禿と称したのは、実は法然の「ただ念仏すべし」という仰せにしたがおうとしたためであった。

法然は一代の説法を煎じつめた『一枚起請文』において、知者のふるまいをせず、愚鈍の身になす念仏が、自分の「ただ念仏すべし」という念仏であるとした。親鸞は八十八歳の手紙で法然の言葉を、更めてかみしめている。それは親鸞が法然の吉水草庵にいた折のことであった。ある日、一文不知の愚かな人たちが吉水草庵にたずねてきた。法然は、にっこりと笑って、この人たちは必ず浄土に往生する、と言われた。それに対して、知者ぶった人たちがたずねてくると、頭をかしげて、この人たちは往生はどうであろうか、とその往生を疑われた。こういうのである。この親鸞の記した、法然の言葉は、さきの『一枚起請文』と一致している。法然の念仏は、知者のふるまいを拒むものであった。愚鈍にかえる

念仏だった。あさましい、一文不通の愚かな、いなかの人びとにかえる念仏だったのである。

こうしてみると、親鸞が回心以後、そのような愚鈍でないかの人びとと交り、愚禿と名のつた意味がわかる。

親鸞は、文字のころも知らない愚かな人びとこそ真実の心の持主とした。それに対して賢々しき、知者のふるまいをする人は偽善者であるとした。

(四)

法然のただ念仏とは、義なき念仏、様なき念仏、風情のない念仏、いろどりのない念仏ともいわれる。義といい、様ないい、それは仔細、理由、根拠、目的という意味である。したがって、義なき念仏とは、無理由、無根拠、無目的の念仏である。ところで知者のふるまいをするとは、理由、根拠、目的を求めることである。それ故、義なき念仏とは、そうした知者のはからいを真向から否定するものである。

それは義づけ（正当と理由づける）ようにする一切のはからいを拒絶する。つまり、義なき念仏とは、義づけることを一切否定し、すべてを相対化するものである。ここでは善も仮りの善でしかない。悪もない。総じて、善も悪もないのである。

自力とは自己をよいものと義づけることである。自己を正当化し、評価されたいと期待する心である。義なき念仏とは、そのように自己をよいものと義づけることをご破算にすることである。すなわち、義なき念仏とは、自力を否定する他力なのである。

(五)

法然が偏えに帰依した善導は、知識、知恵は自利であるといった。人間の知識、知恵は自分の利益しか眼中に置かないのである。西行法師は己れの罪ある言葉におそれていた。人間の言葉には罪があるのである。したがってロゴスは清浄なものでなく、汚れた罪障を持っている。言葉、ロゴス、知識がもと

もとそういう自己中心で、罪障を持っているものであってみれば、そこから出た文明、文化、科学といったものがいかに危険なものであるかがわかる。それは私たちがこの眼で、いやという程、現に見ていることだ。ある作家はこういった。知識を売って生活することは最も卑しいことだと。いい言葉だと思ふ。世の知識人、文化人、科学者たちはよく味うべき言葉だ。

親鸞の言葉を綴った、いなかの人びとの筆になる『歎異抄』を読んでいたら、兎の毛や羊の毛の先にいる塵、とあった。毛の先にいるというのだから、毛の先端に付着しているという意ではない。毛の先にとまっている塵という意である。塵がトンボのようにとまっているというのである。ここでは塵は単なる物質ではない。生きものののだ。「汝」と呼びかけられるものなのだ。仲間なのだ。いなかの人びとの心とは、こうした塵、芥をも、「汝」とし、仲間とする心なのだ。塵、芥を自分たちと同じ仲間の

一員とするのである。屑とされるもの、無価値とされるもの、無用とされるものを大切にし、決して切り捨てない心である。

こんな心は、発想は、知識人、文化人、科学者からは決して出てこまい。

念仏の妙好人は、栗を虫が食ったといって怒っていた人に、虫だつてうまいものなら食べたいのは当り前ではないか、といったという。栗は何も自分だけにあるのではない。こういった心が念仏者にひらけてくるのである。こういう心が開けてくると、人生は窮屈ではなくなる。のびのびと楽しめるようになる。愚かないなかの人びとにかえる法然、親鸞の義なき念仏は、こういう心を開かせてくれる。これに對し、知識人、科学者の発想は、豚のシッポや鶏のトサカが人間の食用にならぬから食用になる肉の方にまわせ、といって、これを無用とし、切ってしまうのである。



死を忘れた現代人

藤井 正雄

(大正大学助教授)

○

戦後三十年も過ぎた今日、現代人の宗教意識上の最も大きな変化とは何か、またその特徴は何かと問われれば、まさに現代人は死を忘れてしまったことだと答えるを得ません。

戦後いちじるしく変った点といえば、第一に法制史上

の変化が挙げられます。新憲法は「信教の自由・宗教分離」の大原則を樹立しました。その大原則にたつて、現行の宗教法人法は、法的規制の対象を宗教教団のもつ物的側面、すなわち本堂や墓地などの宗教施設や、財産、収入などだけにしぼり、宗旨・教義の規定・教団機構・布教はそれぞれの宗教教団に任せることにした訳です。このことは、現代における宗教が完全に私的な存

在になったことを意味します。誰でもどんな宗教信仰をもっても構わないし、また信じなくてもよいのですし、またどんな宗教教団でも設立することができる自由をもつことになったのです。

○
ですから現在宗教教団は多数ありますが、それぞれの教団は己が主張する教理を自由に人々に訴え、人々はたくさんある教団のなかから、最も個人の信仰として適わしいものを選択する自由をもつという、いわば諸宗教の競合時代となったといえます。

その結果、戦後おおくの新興宗教が誕生しました。新興宗教は、戦後の精神的虚脱状態にあり、病・貧・争に苦しむ人々に、現世利益を説いて龐大な信用を集めました。

いわゆる既成教団と新興教団の違いとは、既成教団は生死の解決を求め、新興教団は生死の解消を計った点にあるとかつて本を書いことがあります。現世利益を説くことは、生の拡充をおしすすめ欲望を前面に押しだして、人間の生き死にの問題を回避してしまう危険性を秘めて

いる訳でして、一連の新興宗教はトランキライザー（精神安定剤）の役割を果しましたが、根本的な生き死にの解決は問題にしなかったといえます。

○
仏教は独死独生を説きます。どんな人間でもたとえ両親の愛に育まれて育ったにせよ、気がついたときには人生まれてしまった存在√で、八勝手に生んだ√と両親になじっても、所詮は自我に目覚めれば自分の意志で生きていかなければならず、どんなに地位、財産に恵まれても一人で死んでいかななくてはなりません。ところがつい死んでいく存在であることを忘れて、生きる目の前のことだけに目を奪われて、欲望の塊になってしまふのです。

ところが、新興宗教だけでなく、既成教団も、つい最近までの経済の高度成長に目を奪われて、寺の伽藍は立派になったけれども、また先祖供養には力を入れても、生死の解脱はあまり説かなくなってきたことは否定できないでしょう。

このような状況は、仏教界を含めて、日本人すべて

が、まさに死を忘れた現代人になってしまったことを告げているといえるのではないでしょうか。

このような状況になったことについては、さまざまな要因が考えられます。平均的現代は葬式、法事のときしか手を合わせることを忘れてしまっているのです。葬式、法事が終れば、△あいつは無理したから死んでしまった。かわいそうなことをした▽と思うだけで、いわば他人の死が日常化されてしまったといえます。人々は、死のことを怖れてはいませんが、死なないためにせっせとビタミン剤を飲み、いろいろな健康食とか、何が効くのと薬を求めて汲々としているのです。

葬式も華美に流れていることは事実です。今日の葬式は会葬者に死を忘れさせるように企業化がなされていることを指摘しなければなりません。屍体はなるべく美しく飾り、遺族のほかに隠そうとする努力がなされています。葬式は生者のためにのみあるのでしょうか。

私が提案したいのは、たとえ子供であろうと、どんなショックが大きかろうと屍体をみせることをすすめたいと思っています。

○
私事にわたりますが、私が尋常小学校入学前に祖父の葬式にでたことをいまでも覚えています。たまたま父親が風邪で高熱にうなされて臥していたこともあり、野辺の送りには母親の手にひかれ位牌をもって火葬場にいきました。最後のお別れで、母親に抱かれて棺の中に横たわっている祖父の顔を見ました。祖父はローソクのようにあまりにも白く、鼻孔には脱脂綿がつまっていた、生前の祖父とはあまりにも変りはてた姿にショックを受けたことを今なお鮮明に覚えています。

考えてみますと、たとえどんなに悪人の親であっても、その子供にとっては幼なれば幼いほど、かけがえない親であることには変りないと思います。かけがえない親であればこそ、その死が悲惨であればある程、人生の無常を子供に教えることができるのではないのでしょうか。最近私は、僧俗を問わずなにびとも自らの死によって最大の説教師になることができるのだと思うようになりました。

死の問題を回避することなく、死を直視するなかに、

信仰は生れてくるのだといえましょう。一本のローソクは赫々と燃えて、周囲を照らします。しかしローソクはロウを溶かしながら燃えているのです。ローソクの火は生命、ロウそのものは肉体です。私達はまさに身をけずって生命の火をともしていることになります。

かけがえない生命を大切にすることは、死を見つめることから始まります。再び私事にわたって恐縮ですが、私の僧名は深諦と号します。冗談に「私はよくよく深く諦めた人間である」といいます。「諦める」とはすべてを投げだすという意味ではなく、明らかにするとう意味であることはいうまでもありません。すなわち、物事を明らかにして、みきわめるといのがその意味です。



現実をふりかえってみますと、どちらかといえば私は小賢しく学問などして、僧名に反してはいないかと反省している昨今です。

「自灯法灯、自帰依法帰依」自己を灯とし、よりどころにするためにはかない自己の存在、生き死にをみきわめるほかにはないでしょう。独死独生の自覚にたつと

き、自己の無力さ、有限さが自覚されてきます。すべてを脱ぎ捨ててこそ、浮ぶ瀬がでてくるといえますし、限りない究極の存在としての阿弥陀仏との出会いがあるといえましょう。私の好きな法然上人の歌は、



生けらば念仏の功積り、死なば浄土へ参りなん。とて
もかくてもこの身には思い煩ふことぞなきと思
いぬれば、死生ともに煩ひなし

というお歌です。浄土宗の教えはこの語に尽きるといえます。死生ともに煩ひなしの心境には、これまで述べた人生の根本問題である生き死にを見事に解決した、真の仏教者の姿があると思います。



現代の仏教は観念の上すべりの傾向が強くみられ、生活の仏教は慣習となり、読経、戒名、墓地などが金銭の売買の対象となつては、少なくともそんなものは信仰とはいえないでしょう。

目まぐるしい程までに動く社会状況、多忙な生活のなかにも、静かに自己をみつめる時間が欲しいものです。

こんな世の中だからこそ、今日ほど信仰を必要としている時代はないと思います。



—— シリーズを閉じるに際して ——

現代人の心の世界

「十人十色」、「人さまさま」などといわれるように、人はみなそれぞれ別々の顔をもち、別々の心をもっている。個性のない人間などはいないし、心のありようは千差万別、立居振舞いのささいなひとつをとっても、だれもが独自の領分を保っている。こうした人間が喜怒哀楽等のさまざまな感情に左右されて、いろいろな立場で生きているのであるから、人間社会の複雑性、猥雑性はいままら改めて述べる

ことでもあるまい。いつの世でも、現代という時代は、喧噪で混沌とした姿を呈しているものである。まさに、新聞の三面記事にぎわすようなことは、人類の歴史がはじまってからこのかた、営々と繰り返してきた、このいとおしき人間の自然の発露の結果であろう。しかし根本的には変らない現代という時代でも、今日のように物質文明の過剰な発展による社会不安は、私たち人間の心をむしばみ、おびや

かすものとして、かつて経験したこともないほどの不吉な徴しとして受けとめられる。氷のような機械の音はさらにコンピューターの不協和音に転回して、私たちの暖かい血のかよっている肉体と精神を少しずつ侵かして行く。こうした時代にたびたび人間の心の不毛が叫ばれるのは、砂漠と化した社会を建て直すことのむずかしさを知って、そうなつては決してならないという願望をこめた、意ある人々の切実な要求であろう。

このような現在の人間がみずから置かれている状況を振り返って、改めて私たち自身の心の向けて、そのありようを尋ね、心の問題を真摯に考えてみようというのが、このシリーズの基本的な願いであった。そしてその際にいろいろの分野ですでにご活躍のみなさまに、それぞれの立場で自由に考えていただき、随想風に玉稿を寄せていただいたのである。シリーズの冒頭で、

「加速度的に展開する現代文明は、一個の人間にとつてはあまりにも巨大化してしまった。もはや一人の人間の単位では、現代の世界像は測り知れ

ない。そうした時代にあつて、私達は今、人間のこのころのことについて想いを馳せてみたい。そこで今回は、「現代とこのころのシリーズ」と題して、色々な道で精一杯生きて来られた方々に、そのこのころの歴史を振り返っていただき、また現在の心境を語っていただくことにした」

というようにことわたたのも、まさにそうした意味からであつた。もとより、このような企画の背景には、読者諸氏自身に、心のありようについて想いめぐらしていただき、みずからの思索によつて、『浄土』誌の寄せられた一文をさらに価値のあるものとしていただきたかつたのである。

さて、シリーズを閉じるに際して、皆様からお寄せ願つたご意見も、少ないながらもないわけではないので、二、三紹介したいのであるが、いずれも企画の貧困とこうした心の問題を考えることのむずかしさを指摘しておられるので、編集者としては、まず執筆の諸先生と読者諸氏に対して心から謝罪しなければならぬ。

東京のある住職からは、

「もう少し焦点を絞って執筆していただくべきであつた。編集企画の一層の充実を願う」

というように指摘され、埼玉にお住まいの会社社長の方からは、

「もっと多くの方からのいろいろな視点での意見を集めるべきであつた」

と要請された。またある婦人は、

「人の心の問題を扱うのはむずかしいことです。

でも『浄土』のこのシリーズのタイトルを見て、私自身が今の自分のことを改めて考えようとしたことは確かです。『浄土』は信仰の雑誌ですが、でも信仰心とはつねに自分の心の中の問題で、自分自身の努力によって養わなければならないものと思つています。結局すべては、自分の心で解決しなければならぬと思います。もちろん暖かい人の親切（おもいやり）を忘れようとは思いませんが……」

などと述べられている。確かに、人の真心（まごころ）の問題でもあり、具体的に目に見えるものではない。

しかしながら、

「人と人との交流は、あくまでも心と心の交流です。物と物との交流は決まらないのです」

という北海道にお住まいの方々の意見は、まことに核心をついた言葉であると思う。

このほかにも幾つかの便りをいただいているが、いずれも本誌を長い間購読してこられた皆様の、ある意味では激励の言葉でもあつた。このような意味で、このシリーズが読者諸氏に向けて日々の生活の忙しさの中で自分自身の心のありようを考え、さらに人としての心の持ち方、あるいは人間の心の諸相について、一時でも考慮していただくきっかけとなつたとすれば、それなりに意義のあつたことでもあらう。

確かに宗教は人間の心へ向けて営まれるなしわざである。しかし対象となる人間の心理の様相は、まことに多種多様である。仏教でいう「八万四千の法門」とは、まさにこのような多くの心差しを有している人間に対して、それぞれにふさわしい教えを用

意しているものであろう。それはまた、時代と風土の異なった環境社会の中で、あなたの人間の営んできた歴史の要請として、生まれて、悩み苦しむ、そして、死んでいった多くの人々の求めに応じたさまざまな仏の教説であったわけである。

ここは保ちがたく かるくたちさわぎ
意のままに 従ひゆくなり

このころを ととのふは善し

かくととのへられし心は たのしみをぞもたらす
ここはまこと見がたく まこと細微にして
思ひのままにおもむくなり

心あるひとは このころを護るべし

よくまもられしころは たのしみをぞもたらす

——友松円諦訳『ダンマバダ』より

心のありようを問うことは、みずからの心へ向けての働きかけであった。編集者の企画のいたるなから、物足りぬ面もあったろうが、読者諸氏がこうした姿勢によく気付いて下され、執筆の先生方の説かれるところを十分に理解していただいたと思う。

△編集部記△

「浄土」教化トラクト

『浄土宝暦』

B6判・表紙別 三十八ページ

定価一部四十八円(二百部以上四十五円)

送料実費

◎檀信徒の皆様への新年のご挨拶等に恰好の
施本となります。どうぞ広くご利用下さい
ますよう宜しくご注文をお願い申し上げます。
す。ご便宜はできるだけおはかり致します。
す。寺院名などの別印刷もうけたまわります。

発行 法然上人鑽仰会

『般若心経』といえは、仏教のことをそれほどよくわしく知らない人でも、まずは一度は聞いたことのある經典名であらう。有名な「色即是空、空即是色」の一句も、このお経に記されているものである。『仏說摩訶般若波羅蜜多心経』というのが、正式の経名であるが、続いて「觀自在菩薩（カンジザイボーサツ）……」と発せられる、読経の声は誰もが聞いた覚えのあるもので

(お) (経) (の) (べ) (い) (じ)

般 若 心 経
はん にゃ しん ぎょう

あらう。このお経はそれほど広く流布しており、現在でも日本仏教のあらゆる宗派にわたって読誦されているのである。

この『般若心経』は、簡便に略してはただ単に『心経』ともいわれる。経題の意味も一般には「般若の心の経」ということで、字義通り、般若空世界の真髓を表わす経、あるいはその心持の核心を説き明かす経というように理解してよからう。事

実、三百字に満たない簡潔な経文には、いわゆる般若思想の根本問題が要領よく示されている。

さて大乗仏教は、およそ紀元前一世紀か、あるいはもう少し前の時代に、釈尊亡き後の佛教教団の展開において、きわめて革新的な新興勢力として芽生えたものであるが、『般若心経』はその流れの比較的初期の時代に經典としての出発点をみるこ

ころである。まさに『般若心経』は、歴大なる般若經典類の中のひとつの単独經典として、原典となるサンスクリット本にも大本と小本の二系統があり、数種の漢訳も伝えられている（八存四欠）。その中から現在私たちが利用しているのは玄奘三蔵の訳したものである。

この経の内容は、総じて色（形あるもの・物質）、受（感受作用）、想（表象作用）、行（意志行動）、識（認識作用）という自己自身と外界の環境世界を構成する五つの要素、つまり五蘊の皆空觀に裏付けられて、その空相の無所得のありようが、六根（眼・意・鼻・舌・身・意）や六境（色・声・香・味・触・法）の十二処、さらに六識を含めた十八界、また無明以下の十二因縁の教説などに即して説かれる。そして怖れなき涅槃究竟の悟りの世界は、般若の智慧の完成（般若波羅蜜）によって成就されると説いている。かくして弘法大師が「秘密真言分」と称した最後の一段は、この般若波羅蜜の神呪が陀羅尼によって示される本経の象徴部分である。

(H)

随

想

ス イ ス の 秋

山 やま 田 だ 昭 しょう 全 ぜん

(大正大学教授)



ヨーロッパ日本研究協会 (European Association for Japanese Studies) という団体がある。ヨーロッパで日本のことを研究している学者たちが集まって三年前に組織した日本学の研究団体である。こんどスイスのチューリヒで第一回の大会が行われたのであるが、それに出ないかというさそいがかった。

私は海外に一度も出たことがない。日本の古典文学をやっているので中国や朝鮮ならともかく欧米の文化を知らなくても研究にはいっこうさしつかえないし、知らないことにひきめを感じる必要もないと思いつけていた。だから招待を受けたとき、正直のところ少々おっくうで、腰を上げる気にはなれなかった。結局旅費は向うさま持ちという添え書きにひかれて行くことにしたのだけれども。

今は行ってきてよかったと思っている。いろいろなことを知ったことと、言葉の不自由

が必然する厳しい緊張にも、まだまだおれは堪える力を持っていたんだという自己確認ができたためでもあろうか。

パリに一週間で、そこから鉄道でスイスに入った。見知らぬ国へ来て、見知らぬ駅から長距離の汽車旅をする。これだけで意外な緊張を強いられるものである。切符はどこで買ったらいいか、列車は何番線から出るのか、乗った車が確実に目的地に着くのかどうか、日本にいれば何でもないことだが、一つ一つが不安になってきて、重い荷物をひきずりながら人にたずねたり、標識で確認したりしなければならない。

パリのリヨン駅を出て三十分もたたないうちに私は鉄道にしてよかったと思った。急行列車でももの十五分もしないうちに街なみはまったく消えて、実に牧歌的なフランスの農村風景がひらけてきたからである。快い旅情がわいてきた。なだらかな丘陵に青々とした草がはえ、あちこちに牛が群れている。十二、三頭ぐらいの一群が視界から去ってゆくとまた新たな一群が窓枠の中に入ってくる。ボツンボツンとカラフルな農家も樹間に見える。二、三度とまった駅の周辺を除いて、このような景観は結局フランスの国境まで続いていた。石ばかりでできていたパリという都会の意外な小ささにくらべると、農村は広くかつ奥ゆきが深い。フランスは農業国なんだという発見のようなものを得た思いであった。

一本の列車に乗ったまま、フランスからスイスという異国に入ることができるのも私には驚きであった。国境近くの小駅にとまるとどやどやと人が乗り込んでくる。旅客ではなく、鉄道公安と税関のお役人であった。簡単にパスポートをしらべ、またそそくさといっってしまった。走り出した車から注意深く窓外を眺めていたが、どこで国境を越えたのか

わからずじまいであった。当り前のことなのだが、ヨーロッパの国々はこのようにあつざりと国と国とが接している。道をへだてて農家が二軒建ち、一軒はフランス人でもう一軒はスイス人だということもあり得るわけで、日本人の感覚ではこれが実に不思議でならないのである。「国境親善」とか「世界平和」などという概念も日本人のそれとたいぶ違うものであるに相違ない。そんな思いが去来するのであった。

スイスに入ると牛の群れが幾分多くなったような気がする。地図の上では湖水が目につきはじめる。ノイシャテルという駅に近づいたころ、ふと反対側の車窓に目をやると、いきなり巨大な湖が飛び込んできた。あまり突然だったので息をのむ思いであった。こちら側は湖水のところまでゆるやかなスロープになっていて赤や青い瓦の人家が点々としている。教会の上がった屋根も見える。遠い向う岸に黒々とかすんだ山脈が続いていた。午後の日ざしが湖水にはえて、下の方から光りが浮いてくるようであった。

スイスはどこへ行っても清潔の気に満ちていた。日本の畠にあたるところはほとんどが牧場で、青々としたやわらかそうな草が生えている。それが芝生のように丘陵を覆っている。丘をめぐる河が流れ、蛇行してみずみずしい緑の森かげに消えて行く。豊かな水をたたえた湖水がそこにひらけ、万年雪を頂いた巨峰が視界をよぎって青くすんだ空のはてまで続いている。はじめフランスの農村を牧歌的と見たが、スイスはそれに雄大な山々と透明な水が加わって、さらに一段と牧歌的であった。「そうか、ハイジはこのような自然の中に住んでいたのか……」青春時代の回想とともに、アルプスの少女のおもかげがよみがえってきた。こころよい懐郷であり旅情であった。

スイス国境の小駅から足にギブスをはめた青年が乗り込んできて、私と妻だけが占領し

ていたボックスの片すみに遠慮がちに座った。都会の整骨医に通うのであろうか。スイスの山の空気で育った人と話がしたくなって思い切って声をかけてみた。

「……ニヒト……イングリッシュ……」

手ぶりと表情で、ワレ英語ヲ話スコトヲ得ズと言っていることがわかった。沈黙したまま次の駅で降りるとき、松葉杖がいたいたしだったのでブラットフォームまでボストンバッグを運んでやった。彼ははにかんだ笑いを浮かべながら、片方の杖をあげ、私と妻を見えなくなるまで送ってくれた。

インターラーケンとは山あいの静かな町であった。メインストリートの片側が公園になっていて、街路樹の奥に芝生とまばらな林とが広がっていた。木々は黄色く色づいていた。私の宿はその林の一角にあった。通された部屋は十五畳ぐらいもあろうか、バスルームも実にゆったりととてある。電灯、机、椅子のすべての調度品が清潔でしかも古めかしい。すぐ裏に小さな流れをへだてて瀟洒な教会が建っていた。

私も妻も、この宿がすっかり気に入ってしまった。パリの鉄筋コンクリートのアメリカ系高層ホテルより、こちらのほうがよほど宿屋らしく、うるおいがあった。リセブションで聞いたら一泊延長してもかまわないということである。私はベルンのホテルに電話して、都合によってそちらにとまれなくなったからとことわり、インターラーケンに二泊することにした。

翌日ユングフラウヨッホに登った。朝がたどんより曇っていたので、朝食のときボーイに聞くと、今日はすばらしい天気になるだろう、おまえはラッキーだと言った。食事を運びながら口笛を吹くくせのある快活なボーイであった。

よくもこんなところに線路を敷いたものだと思心するほど、急な斜面や切り立った崖のほとりを縫いながら登山電車が昇って行く。ところどころに牧場があつて、牛が目の前で草をはんでゐる。くびに下げたカウベルが、草をはむごとにカラカラと鳴る。あつちでもカラカラ、こつちでもカラカラ。きのうの列車ではわからなかったが、牧場では実ににぎやかな音楽もかなでているのであつた。

ユングフラウは聞きしにまさる絶景であつた。天に突き出た峰の裾を巨大な氷河が純白の雪を漫々とたたえて流れ落ちてゐる。空は吸い込まれるような青さだつた。人はおそらく、まことの清らかさがどんなものであるかをこの無言の自然から学ぶであらう。雪塊にとまて人おじしなない鳩に似たまっ黒な鳥のはねも実に清らかであつた。くちばしだけがあざやかな黄色で、全体がしつとりとぬれてゐるように見えた。

足もとから雪けむりが吹き上げてくる。毛糸のシャツを一枚着込んできたけれども、つめたい風が肌にしみる。空気がうすいため、息切れがしてついに雪のあるところまで出られなかつた妻が気ばかりでもあるので、早めに切り上げて小屋にもどつた。

スイスはどこもかしこも清潔だつたという印象は、こうした山の体験にもとづくところもあらう。またスイス人がたしかにきれいづきであるのも、山のたゆみない教訓が肌身に ついてゐるからであらうか。

「日本の街がこの国のようにきれいであつたらお互いの心がどんなにかなごむことであらう」

木の香のただよう夕もやの町道をそう思いながら宿に帰つた。



始めあれば終りあり

浄土教の流れ

△十一▽

たけ なか しん じょう
竹 中 信 常

(大正大学教授・文博)

— 〇 —

どんなもの、にでも、ことにでも、「始め」があれば必ず「終り」がある。反対に、始めが無ければ終りも無いわけである。釈尊のお説きになった仏教も、その説かれた内容は無始無終の真理であって、永遠に変わることはない。しかし、それが「仏教」という形をとって、いま

から二千五百年の昔に、インドにおいて釈尊によって「始められた」以上、いつかは、必ず「終り」が来るはずである。なぜなら、釈尊の教えの内容の根拠をなすものは、「すべてのものは移り変わる」ということであった。仏教もまた例外ではなく、当然、長い歴史の間にはいろいろと移り変わり、やがては消滅すべき運命にあるのである。

ただ問題なのは、「移り変わる」道筋がどうなっている

かということである。上向きか下向きかということである。このことについては前号で述べたように、仏教をはじめキリスト教など宗教の世界では、残念ながら「下向き」の道筋をとっているようである。そしてこの下向きの道筋を三つの段階に区切っている。

釈尊が亡ってから始めの五百年（もしくは千年）は「正法の時代」であった。釈尊の教えを正しく受けとって、熱心に修行し、その結果さとりを開くことのできた時代であった。その次の五百年（もしくは千年）は「像法の時代」で、仏教の教えをうけつぎ、仏道を修行するものも多い時代であるが、残念なことに、さとりを開いて完全な人間になるものがない時代となった。そして最後の千年（もしくは万年）は「末法の時代」といわれる。まじめに仏道を修行するものもなくなり、したがってさとりを開くものもない。ただ教えだけが形式的に残存している時代となってしまったのである。

時代の移り変りをこのように下向きのものとみる見方は、本来は、釈尊のおいになった「よき時代」から遠ざかれば遠ざかるほど、釈尊の真意が拘みにくくなり、それだけに一そう努力精進しなければいけないという、

自分をいましめ、自分を引きしめるために考え出されたことなのである。

ところが、実際の歴史をふりかえってみると、仏教の生れた肝腎のインドで仏教がほろび、仏教に反対するものたちがしばしば仏教を迫害し、中国に移ると、例えば北魏太武帝や北周武帝などの仏教迫害が相い次いだために、仏教は本当に滅びてしまうのではないかという気持ちが強くなってきた。そして「末法」は現におこりつつあるのだという、さし迫った危機感が抱かれるようになったのである。わが国に至っては、実際の歴史の上から教えて後冷泉天皇の永承七年（一〇五二）が末法の時代に入った年とされた。法然上人が生れる八十年前のことである。

こうして、末法は内側では人々の仏道修行への自誠から考え出された時代観であったが、打ちつづく天災地変や仏教迫害などが原因して、実際の歴史の上に写されて、本当に世の中が末代になったと考えられるようになってきたのである。しかし、考えようによっては、末法の「危機」は歴史の一定の時期に限られたものではなく、現にいま、わたしたちの住む世界にも危機は渦巻い

ているのである。わたしたちをとりまいて現在の危機は大きく分けて四つあるといわれる。それは核戦争の危機、人口過剰の危機、資源涸渇の危機、環境変化の危機である。ボタン一つで地球が火の海になる核戦争はいつなるとき起るか分らないのである。ソ連のミグ二十五がやすやすと函館空港に入ってきたということは、核兵器を防ぐことがいかに不可能であるをまざまざと物語っている。

人口問題も産児制限とか人口適正配置とかいろいろに論じられているが、しかし地球上の人口がドンドン増加していることは否めない事実である。昔から数のふえ方の多いことを「ネズミ算」的といわれるが、人口のふえ方はネズミ算以上で、一八〇〇年当時九億だった世界人口が、その倍の十八億になるのに一二〇年かかった。ところが一九二〇年に十八億になった人口がその倍の三十六億になるのは五十年しかからなかった。この計算でゆくと、今度は三十年で倍の七十二倍になることになる。つまり西暦二〇〇〇年には七十二億の人間で地球は一杯になってしまふというのである。しかも、そうでなくとも不足がちの食料は一体どうなるのか。現在でも、

世界人口の二分の一が住んでいるアジア地域の食料生産は、世界の総生産高の四分の一しかない。算術計算でも半分は不足していることになる。日本についてみると、仮に日本人の全部が米食すると、史上最高の豊作の年でも十人に二人はお米がたべられぬ、つまり二割が不足するといわれる。現在は諸外国から輸入して辛くもしのいでいるが、資源不足の日本がいつまで食料を輸入できるか。全くお先真闇である。それに加えて近年は気温が低下し、夏が短く冬が長く冷害がひどく、米作だけでなく燃料も衣料なども大不足するのではないだろうか。気温の低下はスモッグなどが雨傘のように地球をおおって、太陽エネルギーが地上にまでとどかないといった、公害による原因があげられている。このように数えあげてみると、わたしたちの生活も生命も全く累卵の危機線上にあるといわなければならない。

— 〇一〇 —

われわれ人類の生存はこのように危険な、追いつめられた状況にあるといえるが、しかし、手段のいかによ

つては、何とか切りぬけることができるのではないだろうか。そのためにこそ世界中の学者や専門家がくり返えし各種の会議を開いて解決に努力しているのである。しかし、こうした人間の外側にある危機は何とか切りぬけられるにしても、人間の内側にある危機は絶対に切りぬけることができないのである。人間の内側にある危機というのは、人間が本来その中に秘めているものである。

それは先にも述べたように、すべてのことに始めがあれば、必ずしも終りがあるということである。人間の始めは「生」であり、終りは「死」である。生れたからには必ず死ななければならないのである。人間は生れた瞬間から死すべき運命にある。つまり人間の中には「生・死」という絶対に解決できない矛盾がふくまれているのである。いうなれば「生きている」限り、「死なねばならぬ」危機の上に生きていることになる。

個人の場合では生と死であるが、これは民族・国家にもいえることであり、過去の歴史をみてもいくつかの民族がさかえ、そして滅びていったし、国家の興亡も例外ではない。そしてこれをさらにひろめてみれば、人類でさえ、始めがある以上いつかは滅亡せねばならない。

『日本沈没』などという小説が書かれたのも、人類の滅亡を予想してのことである。これが宗教にとり入れられてキリスト教では終末論、仏教では劫滅尽の思想になったことについては前号で述べた。

そして「末法」の時代がすでに始まっているのと同じく、個人個人の生・死の矛盾もすでに生れた瞬間から始まっているのである。ところが、こうした危機や矛盾を真実に自覚するものは僅少である。頭では「自分もやがて死なねばならないのだ」と理解するにしても、それがその人の生活・思想・行動、いわば人格全体とのかかわりで受け入れられているかというと、そうではないのである。「タバコは健康によくない」ということは、耳にタコのできるほど聞かされているが、それでもなお「わかつちやいるけどやめられない」というのが実状である。

頭だけでなく、からだ全体で知る、つまり「体験」するのでなければならぬ。人間がいかに危機状況にあり、追いつめられた限界状況にあるかを、心の底から、からだ全体で受けること、これがまづ必要なことなのである。つまり、普通一般の手段や方法では絶対に解決不

可能な危機状況、人間がそれ自身の内に持っている絶対的矛盾——いま、現に、自分がそのような状況にあるのだということを、はっきりと、自覚することが解決への第一歩なのである。

—〇二〇—

人間をふくめて動物が「追いつめられた」状況にあるとき、どのようにするか。心理学者はこれを四通りの行為にみる。第一は「運動暴発」家の中に飛びこんで来た鳥などがバタバタ飛びまわって、ガラス戸にぶつかるなど、いわゆるジタバタする状態である。次は「偽死病反射」といって、クモが死んだ真似をすること。人間でもいやだやだと思っていると頭が痛くなったりする。昔よくいわれたヒステリーもこの一種である。三番目は「接触反応」で、犬などひどく叱ると反対に体をすり寄せてくるなど。また突然的な地震などで思わず筆筒や立木にしがみつく場合などである。最後は「盲従反応」と

いって、非常の場合誰か一人二人のいうことにみんなが引づられてしまうことで、関東大震災で本所被服廠で多数の焼死者の出たのきこうした声にひきずられた結果ともいわれる。

いづれにしても、動物ばかりでなく人間でも、せっぱつまって、生命の危険にさらされると理性では到底判断のできぬようなことをするものである。ふだんとても持てそうにない重い物を、火事のととき夢中であついで逃げるなどよく育くことである。危機状況における人間が通常の人間でなくなるということは確かであるが、しかし、人間は動物ではない。何かそこにはちがった力なり手段なりがあるはずである。人間が危機状況にあるとき一体どのようなことをし、どのようにしてそれをのり越えて行くか。このことを「たとえ話」で示している經典がある。次号にはこの「たとえ話」についてみることにする。



法数術語十二カ月（十一月の巻）

たから だ まさ みち
宝 田 正 道

じゅういちがつえ
十一月会

頭に十ないし十一面の化仏を置いて、衆生済度の力を秘めている菩薩のはたらきを表示した観音の称。

じゅういちもんぎ
十一門義

また霜月会ともいう。十一月二十四日、中国天台宗の開祖天台（智者）大師智顗（ちぎ）の忌日を期して、叡山で行われる法華大会のこと。

じゅういちめんくわんおん
十一面観音

十一門科ともいう観經の散善義において、善導が三輩九品を説くのに各品十一種の義を立てた解釈をいう。

「法数」として「十一」を冠した術語は、他に比べて

少く、一般に馴染みのうすいものを除けば、以上の数項目ぐらいしかない。そこで今月は、他の月とのバランス上やむなく、これらのうち特に読者の関心が高いと思われる「十一面観音」について、やや詳しく説明を加え、紙数をふさぎたいと思う。ご了承願いたい。

さて、十一面観音について、よく聞かれることは、十一面が何を意味しているか、ということである。これは古くインドにおいて仏教が密教的色彩を強めるとともに十一最勝王というシバ神が転化して変化像を生じた、と解釈されているが、その十一面とは、『十一面観世音神呪経（耶舍崛多訳）』によれば、「当前の三面を菩薩面となし、左廂の三面を瞋面となし、右廂の三面は菩薩の面に似て狗牙上出し、後に一面あり大笑面となし、頂上の一面は仏面となす」といわれているから、要約すると前三面は慈悲相、左三面は忿怒相、右三面は白牙上出相、後の一面は暴惡大笑相、頂上の一面は如来相をあらわしていることになる（『千光眼観自在菩薩秘密法経』）。つまり、はじめの十面は因位の十地、あとの一面は仏果を示しているものであり、衆生の十一品の無明を断ずる利益がある、という。

また、この観音の執持する器物についても、いろいろあるが、二臂像では右手をのぼして施無畏手とし、瓔珞をからませ、左手に蓮の花を入れた瓶をもたせているのが普通である。ただし、長谷観音のように、右手に数珠をかけ、錫杖をもたせているものもある。四臂像では、これも原則として、右第一手は施無畏、第二手に数珠をもたせ、左第一手に蓮花、第二手に瓶をとらせる形のものが多いようである。

日本における十一面観音の信仰は、すでに飛鳥期よりその造立の嚆矢が見られ、天平以後漸次盛んになったものらしく、一切の憂悩、病苦、災害、悪夢などが除滅されるということから、七世紀以後、その崇拜も広く一般化した観がある。ただし、もと十一面四臂のものが、九面のものから二臂ないし八臂のものまで、さまざまに造像され、化仏の配置具合もいろいろになっている。京都の六波羅蜜寺・観音寺や奈良の聖林寺・薬師寺・法華寺・唐招提寺、鎌倉の長谷寺その他のものが名高く、きわめて多くの寺々に、木像・乾漆像・銅像・絵像などとして安置保存されている。



■読者の声■

ネパール語に接して

よしだ
吉田 勇之助

屢々出席する仏教講座の或る集りでは、開会前に導師

の方が唱えられる「人身受け難し、今已に受く、仏法聞き難し、今已に聞く。この身今生に向って度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。……」に続いて一同が三宝帰依を唱和する。導師の独誦を拝聴するたびに、わたしは大いなる師、仏陀釈尊が御誕生あそばされたネパール王国内のルンビニー（インド国境の近くにある）を是非一度訪ずれたい想いがしてならない。

仏教徒とヒンズー教徒が互いに、憎しみも争いも持たずに暮しているネパール王国を訪れその実際を見たい。数の上では、はるかに少くないらしい仏教徒の生活振り

も見たい。

こういったような願いを持ちながら、自分の体質や健康の面で自信がなく果し得ないのでせめて、その国の標準語を覚え、その国の文化面の知識を少しでも持ちたいと思った。

日ネ協会の会員であったので、ネパールの留学生諸氏から、若い方々と一緒になってその言葉の学修の手ほどきを受ける機会を持つことが出来た。

脳組織がかたくなっていて記憶力もおとろえているわたしのような一九〇〇年生れには、異国の言葉を習うことは、仲々の難事である。しかし、ネパール語は、若い

人々にとっては比較のおぼえ易い外国語ではなからうかと思う。

言葉の順序も日本語の場合と似ている。そしてなによりもネパールが仏陀釈尊の御生誕の地であるだけに言葉への親近感も湧いてくる。欧米語のように、あのとつつきにくい冠詞なるものがない。動詞の変化でも。仏語のような直接法の半過去、単純過去、複合過去、太過去、前過去、単純未来、前未来等々気が遠くなるような面倒なものもない表現方法も大変簡便なように思う。

「お早よう」「今日は」「今晩は」「さようなら」とか、よろしくお伝え下さいのよろしくに相当する言葉も、「ナマスデ」とかやや丁寧になる「ナマスカ」で事足りるらしい。「どうぞ」に相当する言葉もあるけれど、あまりつかわないようだ。話しの語尾の調子を和らげただけで「どうぞ」を用いたのと同じ効果(?)を出している。お願いする場合の「どうぞ」、ものをすすめる場合の「どうぞ」の二通りの言い方がある仏語とくらべるとまことに簡便でよろしい。

かつて、朝日新聞の紙上で「ニューギニア高地人」という連載記事がのっていて、これを面白く読んだことが

ある。社会部員とカメラ部員がニューギニア高地族を訪れた時のものである。その中でモニ族が用いている「アマカネ」という言葉があつて、これは挨拶、感謝等親近感のこもった表現をする言葉とあつた。この「アマカネ」とネパール語の「ナマスデ」には内容に少々似たものがあるのでいたく興味をひいた。

大学生時代、自由科目として選んだ仏語はわたしが行きたかった国の言葉なのだ。事と志とちがつてその国へは行くことが出来なかったが、大戦前その国の駐日商務官事務所で一年間経理秘書として俸給取りをしたことがある。これなぞ好きで習った外国語で拾いものをしたようなものだ。

外国語を習うことは、ある人にとっては苦手であり、ある人にとっては楽しみなものである。又、ある人は必要やむを得ない理由からによるものである。中には、わたしのように自分の持っている願いに幾分でも添いたいことから出発しているものもある。しかし、必要上修得しなければならぬ人はわたしのようになん気な気持ちになつてはいられない。

ネパール語は、インド・アフリカ系の言語に近いもの

で、その文字はヒンディ語（インドの国語）と同じようにデーバナーガリを用いている。恰好のよい文字と感じ、わたしは好んでいる。一八九六年にルンビニーで発見された石柱は、仏法の信奉者であったアシカ王によって建てられたもので、柱の上に書かれている教えの文字はデーバナーガリだそうである。仏陀釈尊がお用にいられた言語は、マガダ国を中心とする東方方言であった……とあるのを渡辺照宏氏（インド哲学、仏教学専攻）の著書で拝見した。マガダ国は仏陀釈尊の故郷カピラバストゥー周辺にあった国であると聞いている。

ネパール語と仏陀釈尊とは全然無縁ではないかもしれないと、自分で勝手に色々想像をたくましくして、ネパール語への親近感を強めている。

ネパール語の文字がデーバナーガリであるせいかヒンディ語と同じものがかなりあるようだ。三宝の中の「僧」
と合衆はサンガであってネパール語では「ともに」とか、「一緒に」という時にこのサンガを用いる。わたしの好きな言葉だ。

ネパール語の学習は、わたしには楽しみであり、好きなことであった。だが、他人様からみて、習いましたと

は言えない程、わたしはお粗末千万なもので、かじったのではなく、なめた程度である。この頃では、小さな辞書だけをたよりに「ネパールのやさしい文学」というような本を、つかえつつかえ自習の意味で読んでいた。言葉の修得がよい縁となつて、多くのネパールの若い人々とも知合になり、又、来日が長い間の夢であった彼の若い娘さんを引き受け、約半月、拙宅で生活を共にした極めて楽しい後日物語りをもたしらしてくれた。縁とよいめぐり合ひは有り難いものと思つてゐる。

＝好評発売中＝

松濤弘道著

新刊『仏教的生き方とは？』

△浄土選書1▽

新書判 二六八頁 価四八〇円

発行所 浄土宗宗務庁

取扱 浄土宗出版事業協会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4

念佛ひじり三国志

(三)

一 法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



一

老牧、江郎次の小屋へはいってきた少年は日焼けして
いて、逞ましい面貌だった。骨格も大人びている。これ
が公達の遺児(わすれがたみ)とは誰が想像できょうか。
ただし声だけは優雅に澄んでおり、音調も高かった。
視力のない生仏には声だけが相手を探ぐる手だてであ
った。公達の血統を確認できた。祖父の江郎次に告げた

のと同じ話をくりかえした。

出家は将来の問題として今はこの牧場で身心を鍛えた
い。と少年はきっぱりと答えた。

「それに、まだまだ世間は物騒じゃからのう。洛中なぞ
へ出ばってはゆけぬ」

と、かたわらから被護者の「馬粥」が口添えした。こ
ちらはいかにも荒武者らしい野太い声だった。

一刻も早く出家を、としきりに説得し続ける生仏。
長楽寺の律師隆寛は助言してやりたい気になった。

ひと目惚れた。この少年を明日にでもわが門中へ招き

入りたい気分が動いてきたのである。

「洛中は物騒だと申すが、かえって此処の方が危険なのではあるまいか」

生駒は軍馬の生産地だ。出入りするのには武士、それも源家の縁類に限られてくるはず。いつか必ず主従の身分出生に疑惑の眼が向けられるのではないか。

論旨正しく説きおこしていった。

少年はともかく「馬粥」の方が耳を傾けはじめた。

「それで、ゆく先は？」

「長楽寺が良い。わしもそこにいるが、隨身喝食が数多くいる。まぎれこめば減多に露顯することはあるまい」

「わしも、ゆけるかな」

「馬粥」は訊いた。

「もちろん同道されて差支えない。ところでおぬしの本名は？」

「それは申し憎い。ウマガニじゃ」

「馬粥か。出向ぐらいは明かしてくれてもいいだろう」

「わしの過去は壇ノ浦で減んだ。おのれを言わず、父母を言わずじゃ」

前号のあらすじ

文治元年（一一八五）秋、三位中将重衡夫人を大原寂光院にたずねた生仏は夫人から重大な秘事を打明けられた。嫡子のないと思われた重衡にひとりの遺児があったということである。法然上人から親しく話を聞き、ともに念仏で一夜を過ごした重衡は嫡子捨丸に法然上人と同様の道を歩ませるように遺言していた。夫人はそのことを生仏に依頼する。

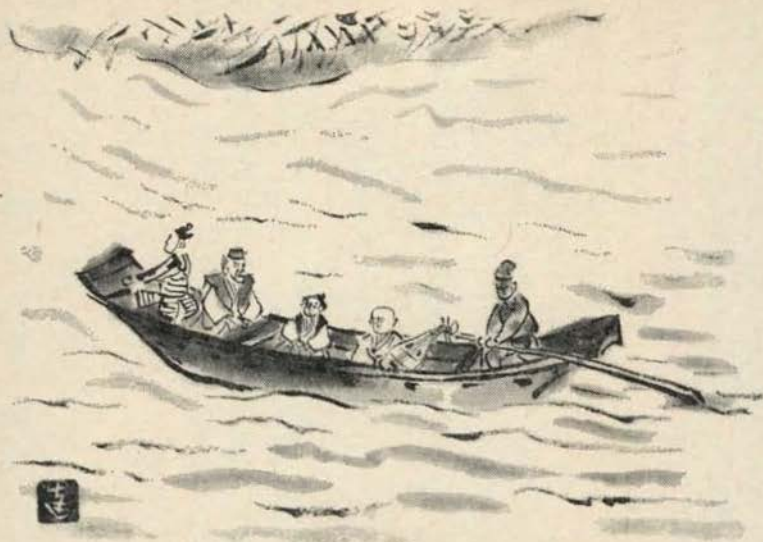
のちに篤信な法然門下となった長楽寺隆寛律師は大原寂光院にしばしば建礼門院を訪れていた。律師は建礼門院の剃度出家に出して、戒師の、長楽寺中興上人ともうたわれる、印西上人を手伝った人であり、また善導大師の専修念仏に仏法の生きる道を見出し、法然上人に憧がれている人でもあった。生仏は隆寛律師に興味を覚えた。そして、重衡の遺児に会うための生駒行きに同行を願う。生仏と律師は生駒の馬飼、江郎次をたずねるが、捨丸は彼を守る謎の武士馬粥と馬を駆って出かけていた。二人は捨丸の帰りを待った。

父母ヲ言ワヌ、宗ヲ言ワヌ

後年になって、この「馬粥」は篤信な念仏ひじりとなる。空阿弥陀仏と名乗るが、その過去を一切語ろうとしなかった。父母の名も腹歴にも沈黙を守りつづけた。

法然の死後、空阿弥陀仏は洛中におけるその中心的な

<淀川渡船>



後継者となる。彼が主催する不断念仏にはつねに数千人の善男善女が結集したと言われる。法然の御影をかかげ、きびしい念仏断座下、念仏行にいそしんだ。

この不断念仏会に比叡山の衆徒が乱入し、乱暴狼藉を働いたという記述は藤原定家の日記「明月記」や慈円の「愚管抄」にも書きのこされている。

しかし「馬粥」が空阿弥陀仏となるまでには幾多の春秋と破乱が待ちかまえているのであった。

この時点で、捨丸主従は後日長楽寺に隆寛を訪ねることを約束する。必ず頭髪を落し、僧形になって来るように隆寛も注意した。

「街道までひと走り、お送り申そう。日も落ちるゆえ」

「馬粥」は申し出た。

二頭の馬上に奇妙な組合せが、生駒の野を走り出ていった。

先駆するのは「馬粥」で、背後に生仏がしがみついていた。後続の捨丸は、隆寛を前に乗せ、あたかも少年が同乗させてもらうような姿勢であった。

枚方まで一気に走り抜け、そこで主従は二人をおろした。生仏たちは渡船で淀川を対岸へ渡った。

「つかぬご縁から何もかもお願いすることになりましたが」

と、生仏はあらためて隆寛に札を述べた。

「いや、わしらは堂奥に安居して、世間のことにうとい。今日は生きた学問をさせて頂いた。札を申したいのは此方のこと。数奇な運命にもてあそばれる少年を救うのはわしらのつとめ、しっかりとお護りし、故三位中将どのの菩提を弔らいさせましょう」

「お願い申し上げます」

「それにつけても吉水のお上人のことだが」

「わかっております。近いうちに必ず……」

隆寛が今日同行してくれたのも吉水の法然上人に紹介する約定があつてこそである。暮れなずむ淀の堤を歩きながら、生仏は言葉をあらためて法然の徳操高い人柄を隆寛に語って聞かせるのであつた。

三位中将重衡の遺児捨丸と、「馬粥」の主従が東山の長楽寺へ現れたのは、それから数日後のことだった。

約束どおり二人は落飾してきたが、僧形は頭だけで見られた姿ではなかった。着衣が牧童そのまま、馬皮の上衣なぞまといつており、腰には山刀を一本ぶちこんでい

た。

「よくそれで見咎められなかったな」

と、隆寛は眼をむいた。

「ほかに着てくるものがない」

「馬粥」は無然として答える。

「ともかくこんなところで……」

うろろされては困る、と隆寛は金堂の裏手、將軍塚へ登る山道にあるおのれの庵居へ誘った。

当分のあいだ、彼らを此処に住まわせ、内弟子として僧らしく仕立て上げる予定であつた。

「ここでは駒と遊ぶわけにもまいりませぬなあ」

少年は起伏の激しい山腹の境内を見わたして落胆する。

「もはや駒なぞとは絶縁ですぞ。若も、わしも僧になるのです」

「馬粥」は殊勝に少年を教え諭している。

なまじ名門の血を継承したゆえに、伸び伸びと少年の春秋を満喫できない捨丸に、隆寛はふつとあわれみをおぼえた。

「明日にでも生仏どのをお招き致そう」

<十一面観音>



山道を右に折れ、林間の庵居へ隆寛は主従を誘ぎな
た。

一一

長楽寺は東大谷の北方にあった。東山（とうざん）と
号した。比叡山延暦寺の別院として建立されたものだ。
そこにある十一面観世音は、遠い昔、伝教大師が唐へ
渡航の折、海路の安全を祈って自ら持参した護持仏とつ
たえられている。天台宗が、洛中における一拠点として
重視している別院であった。

少納言藤原資隆の息で出自も正しく、天台僧として順
調に僧階を踏み登ってきた隆寛が、いましきりに法然の
教えを希求する意図はどこにあったのであろうか。法然
は、比叡山流にとって、いわば叛逆者的存在だったので
ある。

その日、長楽寺を訪れた生仏に案内されて隆寛は吉水
の禅室へ出かけた。捨丸も馬弼も一緒だった。

すでに法然の説法は始まっており、狭い禅室の内外に
数十人の善男善女が熱心に聞法していた。

熱心に……まさしくそうであった。お義理や閑つぶしの閑法ではないのである。彼らは、誰もが不安定な環境にいて、今日を明日を、どうやって暮そうか迷いあぐんでいる。法然の言葉から、何でもいい、生きるよすがの一筋のものでたぐり出したいのであった。眼つきは真剣にならざるを得なかった。

今日の法然は「往生」をテーマとしている。

「人の死には、さまざまな姿がある。そしてこれまでの仏法は、最もおごそかに、美しく死の姿を得たいと求めてきた。それが「成仏」である。そのために修行に励んだ。往生のきわに、何か奇瑞がおければ、成仏の証かしとして、それが尊ばれた。僧であれば、高僧と呼ばれた。しかし、それが必ずしも人生の道理ではないことを、わたしはこの眼で見た」

と、法然は黒谷にいたころの実例で物語った。

ある篤信な老僧が同宿していた。往生の素懷を得ようと願い、老骨に鞭打って廻峯行に明け暮れていた。

その日、老僧は早晩に黒谷を出かけたまま戻らなかった。若き法然らは夕暮れの山道を探がし求めた。

湖月堂と呼ばれる懸崖にある堂前の草むらに老僧は倒

れていた。

すでにむごたらしい死体であった。咽喉笛を山犬に喰い散らされ、両眼は飛び出さんばかりの形相であった。「いちばん醜い死にさまと言わないわけにはいかぬ。では、その老僧は悪徳者だったか。生涯、汚点一つ残さぬ見事な僧であった。間違っていたとすれば、廻峯行をつみかさねさえすれば成仏できると信じたことだ。そんな人間の小賢かしい業で、往生の素懷なぞ得られるものではない」

聞いていた長楽寺隆寛は憤然となった。彼らが信じてきた「行と実践」の仏法をすべて否定し去る論法ではないか。

しかし法然の説法はまだ続いている。隆寛は激怒する胸を押さえた。

「阿善坊と申す僧がおった。僧ではなく、西塔にたむろす衆徒の一人だ。悪虐非道の男で……」

その悪虐ぶりをつぶさに語る。

里に下り、農婦を犯すことを日常にしている。犯すだけではなく、さからう女を何人か殺した。

どうせ良い死にざまはしないだろう、と朋輩からも言

われていた。

ある日、阿善坊はどこから大量の酒を手に入れ、誰にも分けてやらず、ひとり痛飲していた。

夕暮れ近く、深く酔って眠りこんだ。心地良げな寝息が、やがて消えて、朋輩がゆすりおこしても眼ざめなかった。すでにこと切れていたのである。

「私も通りすがりに阿善坊の死に顔を見た。文字どおり円満相好、安らかな顔であった。だから、かたわらの悪僧なぞは思わず述懐したほどだ。摩訶止観なぞよりも、奴が喰らった二升酒の方が遙かに往生には効力がある、とな。これはひどい話だ。悪虐非道の阿善坊が見事な往生相をえがき、篤信な老僧が山犬に喰い散らされ、むごたらしい死にざまをのこした。善因が善果、にはならない。悪因も、こと往生に関しては悪果、とはならない。これは何を物語っているのであろうか」

法然はゆっくり善男善女を見まわした。

そして自力行の空しさを説いた。

おのれの力で、いかに成仏しように励んでも巨大な死の訪れの前にはどうにもならない。阿弥陀仏の本願をたのむ他力以外にはあり得ない、と強調する。

俗業ではあっても、今日一日を精一杯生きて、夕べにはお迎えを頂いても悔いない生活をせよ。来迎仏は念仏する者を間違ひなく西方浄土へお導きになるであろう。善男善女は口々に納得の言葉を洩らしながら、散っていった。

そこで、生仏はあらためて長楽寺隆寛を紹介した。ひとわたりの挨拶はしたが、隆寛の胸からさきほどの激怒は消えやらなかった。

尊い菩提心を否定し去ろうとする法然の論理なのだ。しかし初対面だった。真っ正面からの論戦もつつしまねばならない。隆寛はつとめてものやわからかに質問を發した。

「一つ、おたずねしたいことがござる」

「何でしょうか」

「此方で、ご門中ともどもに暮しておいでですが、實は何に求められているのでしょうか。お見受けしたところ、今散っていった信者たちも布施した様子がござらぬ。誰か特定の檀那でもいるのですか」

「檀那ですと、そんな方はおられません」

「では朝の托鉢でも？」

「ご承知のとおり現在の洛中は極度の飢餓状態です。托鉢したとて寄進してくれる人もいますまい」

「では何で……」

この疑問は隆寛律師のものだけではなかった。承安五年の春、黒谷を去って以来の法然の経済的な基礎は何で支えられていたのだろうか。現在ですら、疑問として残っている問題であった。

法然の母は秦氏の出である。洛北に秦氏の一族が強い経済力を持って住んでいる。そこらあたりがスポンサー筋であろうとか、五条大納言をはじめ、貴紳顯官の戒師となってその謝礼でとか、憶説がかわされている。

それがすべて虚偽ではあるまい。しかし秦氏一族の被護には根拠がない。また戒師としての謝礼にしてもひとときの糊口をひさぐ程度で生活の基礎とはなり得なかった。

往生のことは阿弥陀仏の本願におまかせして、今日一日を精一杯俗事に励め、と善男善女に強調した法然である。彼自身にも生活の基盤がなければならぬ。

「自分たちでいささか作っております」

と、法然はこともなげに隆寛に答えた。

「作るとは？」

「この下、高畠というところにささやかな土地がございます。わたくしたちはそこで野菜なぞを作り、それを食し、また余剰のものは農家に頼んで米にかえていきます。門弟ら一同とこの野菜作りをして、何とか暮しております」

法然は、この言葉を実証するようなフシくれたった手の指で数珠をまさぐっている。

高畠ノ地一所。

建久九年四月八日、法然が書いた「没後起請之」(遺言)の中に財産目録がある。この土地のことに触れている。自分の死後は、これを処分してその半値を門弟に与えるとしてある。

現在と異なり、当時の土地は宅地なぞは二束三文の価値もない。耕された農地だけが換金の価値を持っている。

高畠ノ地……がその農地であることは間違いなく、かなりの年齢に至るまで法然自身が鍬鋤を取って耕作に従

事していたであらうと想像されるのである。

後に門弟となった親鸞が、越後から関東方面を歩きつづ、そこに必ず農民生活を基盤とした布教伝道をしている事実も師法然の生き方を見なつたと考えるべきであらう。

法然は七十歳を過ぎて、オコリの病いで苦しむが、長年の労働がもたらしたものではなからうか。

ともすると法然像を信仰面だけで取り上げ、生活者としての庶民性を見落す傾向が強い。吉水へ集ってくる庶民たちは、法然の説法もさることながら、彼の身体から匂つてくる自分たちと同質の臭氣に、まず魅かれたのではなからうか。

この人も俺たちと同じ汗を流す生活をしているのだ。長袖の被護を受けていない人だ。だから彼が説く話は、と満腔の信頼感を寄せて法然の言葉に耳を傾けたにちがいない。

しかし、律師隆寛の反応は異なっていた。隆寛は貴族の出自であり、天台僧としても筋目正しかった。この時点にあっては、法然が持つ体臭を嗅ぎわけることができなかったようである。

「いささか失望したな」

吉水からの戻り道、むしろ激情を押さえるようにして生仏に言った。

「失望……」

「法然という人、あれは還俗しておる。僧ですらないな」

「そうでしょうか」

生仏はムツとなって旨しいの眼をあげる。

「百姓がちよつとばかり仏法をかじった程度じゃ」

隆寛は憎々しげに言き棄てた。

三

生仏は、あれから何度か長楽寺の隆寛へ申入れをした。重衡の遺児捨丸と従者の馬粥をおのれの観音堂へ移してもらおう懇願したのである。

法然に不信感を隆寛がいだいた以上、長楽寺に主従を置くわけにはいかないと思つた。捨丸の亡父三位中将は法然に師事していたからである。

それと、ここがいちばんだいじなところで、重衡夫人

とも語り合つた点だが、隆寛の膝下においては少年捨丸の身が不安でならなかった。

悪因縁をくりかえす「復讐心」を少年の心から拭ぐに去ることが生仏や重衡夫人の願いであつた。それには、自身がそんな星の下に育つた法然こそ最適な指導者であるはずだ。その法然に違和感をいだく長楽寺隆寛では危険きわまりない。

しかし盲目の生仏では、腕すくでも捨丸主従を連れ戻してくる行動の自由がなかった。ここは南部の僧兵あがりの住蓮にでも頼もう、と心待ちするのだが、住蓮はいっこうに観音堂に姿を見せなかった。鎌倉あたりへ出かけているのかも知れない。

一方隆寛は、手もとに置いた少年捨丸をこよなく愛した。いちづな性格、父親ゆずりの凛々しさは頼もしかった。

隆寛とても捨丸に源家への復讐心をかきたてる意図はなかった。ただこの凛々しさを不動のものにさせたい、と修法の鞭がどうしてもきびしくなつてゆくのである。この鍛えこみは少年の心に不屈な闘志を養つてしまう。

その点は、従者馬粥も同じであつた。

街から戻ると、馬粥はよく腹を立てた。

「今日も錦小路で昔馴染みに出会いました」

「それは誰か」

「名のある者ではござらぬ。新少納言の馬の口取りをしていた松五郎と申す者。それが何たることぞ。いまは北条某に仕え、結構羽ぶりをきかしておる。わしに声をかけ、何じや坊主に身を落されたのか、そなたほどの方なら必ず良き仕官の口がござらう。何なら口をきいてさし上げようか、とぬかすのです。全く嫌な世の中です」

「うむ」

少年の眼に血がさしこんでくる。

「巷の噂では鎌倉どのと、源九郎義経の仲がよろしくないとか」

「ほう」

「戦勝報告に義経は鎌倉へ下向したが、手前の腰越までで、その先へゆくことを兄から峻拒されたそうです。空しく洛中へ戻つた源九郎義経は謀叛の腹を固めたとか。これはもう一度、乱世がよみがえつてまいりますぞ」

「源家の仲間割れは望んでもないこと。この機に乗じて……」

洛中での暮しは、やはり刺戟が強すぎるようだ。こんな長楽寺の奥にひそんでいてもひんびんと情報が流れこんでくるのだ。生駒の牧場とは異なっている。主従の気分は高潮するのだった。

ある日、長楽寺へひとりの密使が現れた。後白河法皇の側近で藤原範家と名乗った。印西上人に対面したが、これは型どおりの挨拶だけで、すぐに刺を隆寛に通じってきた。

隆寛はおのれの庵室でその範家と会った。

「風の噂に聞きますと、こちらには三位中将重衡どのの遺孤がおられるそうで」

いきなり切り出されて隆寛は間誤ついた。

秘中の秘であったことを、なぜこんな男が知っていたのか。この男だけではない。彼を寄越したのは後白河法皇ではないか。

「風の噂とは、どちらからで……」

「出所を明かすわけにはまいりませぬ。何せこの洛中はすべてこれ耳、これ眼でございますゆえのう。そこで」と範家が語り出したのは平家再興の青写真であった。

鎌倉頼朝と源九郎義経の不仲は、去る九月二十九日、

土佐坊昌俊による夜討ちで決定的な段階をむかえた。

その夜討ちとは。

軍勢が押し寄せれば義経も必死の抵抗を試みるであらう。また西国の不平不満の大名たちも義経に味方するであらう。いっそのこと欺まし討ちに。と頼朝が京都へ送りこんだのが土佐坊昌俊だった。

熊野詣でのふれ込みで京へ乗りこんで昌俊を、義経は堀川の館へ迎えた。兄頼朝からの便りを求めたが、刺客の昌俊はそんなものを所持していなかった。

「それでもお前は刺客だな」

と、義経は露骨に言った。

「とんでもない。いまさらご兄弟の仲、書面など必要はないと右大臣どのはおっしゃって私奴におことづてを」

「嘘を申すな」

「嘘ではござりませぬ」

そこで土佐坊昌俊は義経の面前で、二心のないという起請文を七枚も書いた。あるいは焼いて飲み、あるいはそれを神社へ奉納する約束などして、義経に許された。

しかし屋形へ戻った途端に昌俊は軍勢をかき集め、堀川夜討ちの準備をととのえた。

昼間書いた起請文——誓文なぞクソ喰らえてある。

現在でも関西の商家には「誓文払い」という風習がある。

この土佐坊の故事にならって、約束を破るのである。ただしこれは商品の定価、正札を破る意味で、棚ざらえ、バーゲンセールの投げ売りを意味する。

さて土佐坊昌俊は夜討ちをかけたが、かねてこんなこともありなんと待ちかまえていた義経のために木っ葉微塵に蹴散らされ、昌俊は捕らえられて六条河原で斬られてしまった。

「もはやこの事件で、九郎判官どのと鎌倉どのは、もとに戻りませぬ」

法皇の密使、藤原範家は語り続ける。

九郎義経は都落ちを決意したという。

「すでに法皇は、臼杵、戸次、松浦党らに密書をお出しになりました。九郎判官には、彼らに判官どのへお味方せよと申したことになりますが、そのじつは」

と声をひそめた。

九郎判官を斬って平家の公達が西国へ下ってくる。各一族は平家の残党を語らって豊浦に集結せよ、という内

容であつた。

「その公達とは申すまでもなく、こちらにいられるお小僧で侍大将の豊田長門も西国では名の知れた男」

隆寛は、ここで初めて豊田長門という「馬粥」の本名を知った。

「しかし簡単に九郎判官の首を彼らが討ち取ることが出来ましようか」

「それも手だてがごいます」

範家は眼を庭先へ投げた。

この午さがり、隆寛の庵居は無人だった。捨丸主従は金堂で修法中のはずであつた。

(つづく)

『浄土』誌の購読希望者を広くご紹介下さいませ。弊会では新年度から、雑誌の増刷、あるいは新しい「浄土トラクト」などを印刷して、前向き姿勢で弊会発展のために活動したいと思っています。ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

法然上人讃仰会

二 編集後記 二

○銅秋の紅葉も、例年になく早い冬の訪れとともに、大方は木の葉と散って冬枯れてしまった。晩秋は日の暮れも早く、肌寒い風に心も寂しい。「秋の日は釣瓶落し」とはよくいったもので、もはや夕焼けにトンボを追うこともむずかしい。

たそがれ時に夕べの鐘

そのあとには暗い闇

（「瀬を越えて」より）

と歌った詩人はテニスンであったが、秋の終りのいい知れぬ悲しみに通じる心持ちである。

あかあかと灯して秋の行く夜かな 桐明
冬待つや寂然として四疊半 子規

○苦しみを乗り越えて生きて行かねばならないのは、私たちの人生の必然の過程であろう。絶えまない精進と努力は、私たちにつねに課せられた生きることへの義務でもある。こうして暗黒時代に光明を見つける

ものは、いつも自己自身の心に宿っている。「克己心」こそまさに人間の出発の原点でもあろう。揺れ動き、驚き悩む私たちの心は、あたかも「風にそよぐ葦」である。苦しみが重く、永く、暗くのしかかってくる時も、私たちは希望の光をどうしても見出さなければならぬ。それはある意味では果てしない夢、まぼろしのようなものであろう。こうした局面でも辛抱に辛抱を重ねて、必ずや打開しなければならぬのが、私たち人間の使命である。

○ところで慌しい様相で時々刻々と変化する現代社会。「一寸先は闇」という格言のように、一秒一分先の未来にもどのような出来事が起るかわからない。このような未来への不可知性をもった人間が直面する現代の社会不安を背景に、世は予言や占いが盛行している。かくて、「予言によって歴史が動かされていく」というような発言を散りばめた、安居香山先生の近著『予言と革命』は、まさに時宜にかなった恰好の一書である。一読をおすすめる。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 十一月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十一年十月二十五日 印刷

昭和五十一年十一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒〇三 振替東京八一八二一八七番

＝新刊＝

大正大学教授 安居香山 著

『予言と革命 —ここにも大変革の危機がある—』

B 6 判 250頁 定価 850円

- ◎ 予言の書「緯書」の研究者である著者が、自然的破滅でなく人間自身による日本滅亡の危機のあることを、中国・日本の歴史を辿りながら、予言や易の流行する現代社会に訴えた問題の書!!

——目次——

○ここにも大変革の予言がある○予言できめられた日本の紀元
○世直しの改元と予言○予言にゆらいだ日本の歴史○予言で亡んだ始皇帝○中国の歴史を左右した予言革命○予言はどうして歴史を動かすか○予言革命の温床○現代でも予言革命はおこる

〒605 京都市東山区清閑寺山内46-5

発売元 探究社

中住ビル3F

(振替) 京都 21185

漢和对訳 『和訳浄土三部経』 村瀬秀雄訳著

B 6 判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非共ご利用下さい。

万人必読の和文聖典です。

檀信徒心得・訓読・註解つき

『浄土宗^{檀信徒用}のおつとめ』

折本 68 頁 定価 190 円 (100部以上一割引)

折本 80 頁 〈小消息つき〉 定価 220 円 (100部以上一割引)

取扱い 法然上人鑽仰会

〒 102

東京都千代田区飯田橋1-11-6
振替 (東京) 8-82187